

# 令和5年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査における

## 北九州市立 守恒 中学校の結果分析と今後の取組について

スポーツ庁による「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」について、令和5年6～7月に、2年生を対象として、「体力・運動能力」と「運動習慣等」についての調査を実施いたしました。（熱中症等の予防の観点から、20mシャトルランについては、5月中旬から6月上旬に実施しています。）

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

本結果は、学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。また、運動習慣については、学校のみでなく、家庭で運動を一緒に「する・みる・話す」ことが大切です。本校では、運動習慣の確立と授業の充実により、総合的に体力の向上を目指しています。ご家庭でも運動習慣の確立に向けた取組の充実をお願いします。

※ 本調査により測定できるのは、体力・運動能力の特定の一部です。

### 1. 調査の目的

- (1) 国が全国的な子供の体力の状況を把握・分析することにより、子供の体力の向上にかかる施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会が自らの子供の体力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、子供の体力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各学校が各児童生徒の体力や運動習慣、生活習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

### 2. 調査内容

#### (1) 実技に関する調査

[8種目] 握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、持久走・20mシャトルラン、50m走、立ち幅とび、ハンドボール投げ

※持久走か20mシャトルランのどちらかを選択するため8種目となる

#### (2) 質問紙調査

運動習慣、生活習慣等に関する質問紙調査

### 3. 体力・運動能力に関する調査結果の概要

全国・本市・本校の実技調査の結果

<男子>

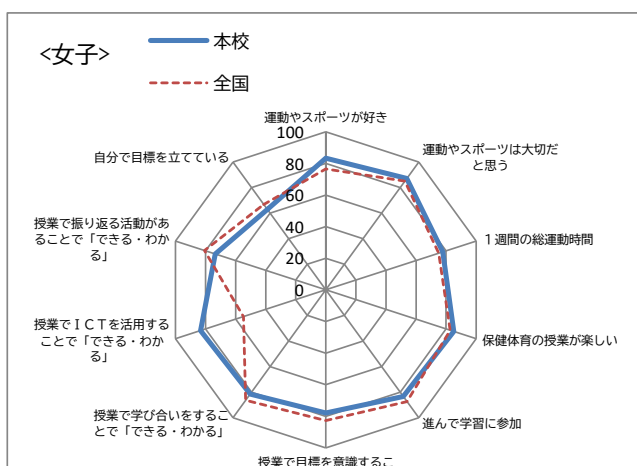
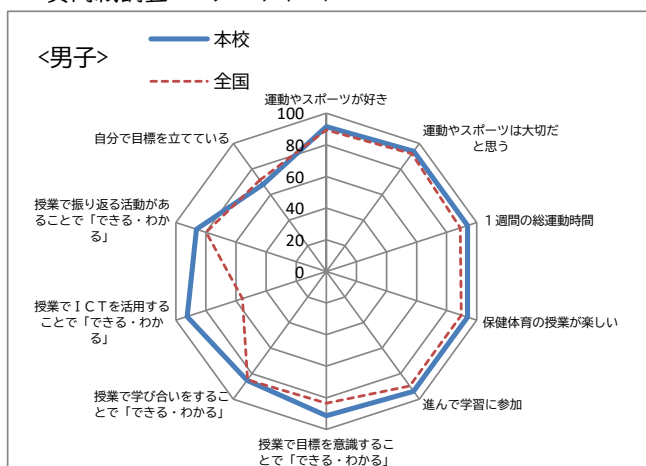
本年度の結果	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	持久走	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール投げ	体力合計点
全国	29.02	25.82	44.16	51.22	409.02	78.07	8.01	197.02	20.40	41.32
本市	29.72	26.24	46.29	51.95	413.28	80.12	7.86	201.52	20.51	43.46
本校全国平均以上の種目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

<女子>

本年度の結果	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	持久走	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール投げ	体力合計点
全国	23.15	21.62	46.27	45.65	306.26	50.70	8.95	166.34	12.43	47.22
本市	23.64	22.08	47.52	46.35	320.97	51.41	8.86	170.70	12.13	48.65
本校全国平均以上の種目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

### 4. 運動習慣や生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査レーダーチャート



#### 質問紙調査の結果分析

成果として生徒は与えられている課題に関しては、自分なりに工夫点を見出し、進んで学習に取り組むことができていることが分かる。特にICTを活用することで、運動量を確保し、ゲーム等生徒が楽しめる環境を確保したことが今回の結果に結び付いていることが分かる。  
課題としては、目標等を自分で計画する値が低いことから、ICT活用方法をさらに見直し、生徒がデータ上で自己の能力を知る機会を設定し、自分たちでめあてを考える場面等を設定する必要があることが分かった。

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科(授業)に関する取組(全校で・学年で・学級で)

体力向上の一環として、授業のはじめに生徒が学年で決まっている体力向上メニューに取り組み、年度はじめの体力テストの結果を向上させるように意識付けを継続的に行っている。また、集団行動を通して、社会人に必要な挨拶等を授業規律の中で確立する学習を継続的に行っていく。

#### ② 運動習慣等に関する取組(1校1取組)

体力向上の取組の一環として、全校生徒で体力向上カレンダーの記録に取り組んでいる。保護者への啓発として、養護教諭と連携し、保健だより等で運動と健康に関して内容をこまめに発信するようにしている。また、体力テスト個人判定票の結果から、体力向上のための取組を個人でプレゼンする場面を設定し、様々な体カトレーニングを共有することでそれぞれの体力向上を意識させることができた。